

Title	生頼範義を探して：みやざきアートセンターによる「コレクション」創出
Sub Title	Looking for Noriyoshi Ohrai. creation of "Ohrai collection" by Miyazaki art center
Author	石田, 達也(Ishida, Tatsuya) 桑川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.24(2016/17), ,p.106- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000024-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生頼範義を探して ——みやざきアートセンターによる 「コレクション」創出

石田 達也
宮崎文化本舗理事長

糸川 麻里生
副所長、文学部教授

本稿は、当センター所員（副所長）の糸川麻里生と宮崎文化本舗理事長の石田達也の共同執筆によるものである。宮崎文化本舗は特定非営利活動法人（NPO）であり、宮崎市内に「みやざきアートセンター」という展示スペースや遊戯スペース、学習スペースなどを備えた文化施設を運営している。糸川は2015年よりこの「みやざきアートセンター」の外部委員をつとめており、施設と法人の運営について諮問を受ける立場で関わってきた。その間、芸術創作の記録を蓄積していくアート・アーカイヴに関わって来た立場にとって、きわめて興味深い事例を知るに至った。それが、宮崎市在住のイラストレーター、生頼範義氏のポスター原画の発見、修復、展示、保存という過程である。

東京藝術大学で油彩画を学んだ生頼氏自身は、「ポスター原画」を「芸術作品」とはみなしていなかった。それゆえ、原画は同氏の自宅の物置等で、文字通り「腐る」に任されていた。しかし、そこには、「ゴジラ」あるいは「スター・ウォーズ」といった、世界にその名が広く知られる超人気シリーズのポスター原画が多く含まれていた。今なお日本全国また世界中に存在する熱心なファンの多くが覚えている有名ポスターの原画である。みやざきアートセンターでは、これらを修復し、3度にわたって大規模な展覧会を行い、宮崎市、宮崎県、また文部科学省などの公的機関に対し、「生頼コレクション」を文化財として保存・管理することを提案しつつある。本稿は、アーカイヴ的機関が本来「芸術」として生み出されたものではなかった原画群に対して新たな価値を与え、文化財と呼びうるものを産み出した過程を報告しようとするものである。

1. 隠遁する職人・生頼

生頼範義（おおらいのりよし）は1970年代から80年代にかけて、一世を風靡したイラストレーターである。平井和正や小松左京といった日本を代表するSF作家の小説の装丁を多く手掛け人気を博し、1980年には『スター・ウォーズ／帝国の逆襲』（アーヴィン・カーシュナー監督）の国際版ポスター、1984年からは「ゴジラ」シリーズのポスターを手掛け、1980年代中盤には日本中どこかの書店に行っても、生頼の絵が描かれた書籍が何種類も販売されていた。以後、2011年に脳梗塞で倒れるまで、SFだけでなく、時代劇、戦記物の小説や、映画、広告や図鑑、ありとあらゆるジャンルで半世紀以上にもわたり日本のイラスト文化を支えてきた。

1980年に出版された初の画集『生頼範義 イラストレーション』（徳間書店）の前書きで「イラストレーターの仕事は



肉体労働者にほかならぬ」と自らの仕事を表した文章を書いた生頼は、マスコミ等の取材も殆ど応じず、表舞台に決して出ることもなく、21世紀を迎えるまで、ひたすら宮崎の地で絵を描き続けていた。

2. 打ち捨てられた「作品」群の蒐集と修復

宮崎市の中心市街地の再開発の目玉としてみやざきアートセンターが開館したのは2009年10月のことであった。開館準備から指定管理者制度を導入したこの施設は2つのNPO法人の共同事業体「みやざき文化村（代表：石田達也）」はNPO法人 宮崎文化本舗と、みやざき子ども文化センターによって構成されている。開館当初から、みやざき文化村では宮崎在住のアーティストである生頼の展覧会を開催できないか模索していた。文化村の中でも議論が起こった。若いスタッフは生頼の存在さえ知らない。企画書にかかれた苗字をどう読んでいいのかも分からなかった。「そんな知られていない人の企画展をやっても採算取れるんですか？」という議論から始まった。宮崎在住という情報は掴んではいたものの、連絡先さえ分からない状況であった。現・みやざきアートセンターのセンター長を務める長岡政己がアートセンターのスタッフとして入ってきたことから住所が判明した。長岡の前職は画材店であり、生頼氏のもとに画材を配達していたからだ。2009年の秋に生頼家に電話で連絡を取り展覧会の話をしたが、いい返事は得られなかった。企画自体を見直しせざるを得なかった。



2012年5月に、みやざきアートセンターは春の特別企画展として「エヴァンゲリオン展」を開催し、関連企画として映画監督の樋口真嗣氏とアニメ・特撮研究家の氷川竜介氏を招きトークショーを行った。その二人との雑談の中で「生頼範義展」を企画したい旨の話をしたところ、両氏より「何でも協力する。日本の今の文化を支えてきた偉大なアーティストなので、是非開催すべきだ」と支援の言葉を得た。

再度、みやざきアートセンタースタッフが生頼家に展覧会開催の打診を行ったが、生頼氏は2011年5月に脳梗塞を発症しリハビリの最中であった。企画そのものが困難かと思われたが、埼玉在住の生頼家の長男・太郎氏が話を聞いてみたいということで、2012年5月10日に上京した石田が太郎氏に依頼をし、展覧会の開催に関する了承を得た。宮崎市郊外の生頼邸を訪れたのは太郎氏が帰省した2012年の初夏だった。70年代に農家であった空き家を買取ったという昔ながらの大きな屋敷の離れが生頼氏のアトリエであった。生頼氏は病気の後遺症で言葉を発することも困難な状態であったが、展覧会の開催に関しては喜んでいただけた。太郎氏に案内された生頼氏のアトリエは、もう一度筆を持つ日のために、ご家族によって、同氏が倒れた日のままの状態で保たれていた。壁びっしり、机の上にも山積みになった写真集や図鑑等の資料、戦艦の設計図らしきものの数々。生頼氏がイラストを描くための素材がところせましと置かれていた。屋根裏部屋と奥の部屋、戸棚の中に保管されていたイラストの

数々、ざっと数えただけで数千枚。油絵も数百点はあった。これらの決していい状態とは言えない環境で大量の作品が保管されていることに、石田は驚愕した。

生頼氏は、作品を生み出すことには全精力を注入する作家だったが、一旦完成した作品を保管するという行為には無頓智であった。作品名のメモや制作年月日なども記載されていない膨大な数のイラストと絵画を整理するところから作業は始まった。作品を整理する作業は、月に一度、1～2日間、太郎氏が帰省したときに、これはという作品を数十点ずつ選んでもらい、アートセンターまで運び入れ燻蒸し、クリーニングが必要なものは行い、それを整理して記録していくという手順で数カ月に及び行われた。整理した作品はイラストの依頼主であった出版社や映画会社ごとに分類していった。

また生頼氏宅には保管されていない作品の搜索も同時に行った。1980年代頃までは著作権も今ほど厳しくなく出版社へ送ったものの返却されていない作品、マニアの間で横流しにあった作品も多く存在した。そのような作品の行方を追い、分かったものはリストに加えていった。

3. 許諾権をめぐる苦闘

第1回目の展覧会を2014年の2月に開催することを決定し、本格的な準備に入った。まずは展覧会を開催するにあたり、著作権元である映画会社や出版社の許諾を取る作業に追われた。開催まで一年半ほどの時間しかないが、著作権を先ずクリアしなければ展示できない。しかし地方の公共施設の管理者がいきなり大手の映画会社や出版社に話を持って行ってもなかなか相手にされないということもあり、樋口監督や氷川氏の協力を得て、業界各社の人脈を辿り著作権管理部門を紹介してもらい、月一回上京し許諾を得ていくという作業も同時並行で行った。朝日ソノラマ、光人社、学研、角川書店、キネマ旬報社、講談社、コーエーテクモゲームス、薩摩川内歴史資料館、サンライズ、資生堂、集英社、小学館、松竹、中央公論社、円谷プロ、東京創元社、東宝、東映、東北新社、徳間書店、日本 Herald、ハセガワ、早川書房、扶桑社、双葉社、六興出版、等々。すでに存在しない会社もあったが、1回目の展示に必要な会社だけに絞ってもざっとこれだけの数があった。この全てにあたって許可を取る旅が始まった。月に一度、二泊三日で上京してそれで回れても5件程度。石田は宮崎から上京するのだが、先方はこちらの都合には合わせてくれない。もちろんスケジュールもうまくハマればいいのだけど移動の時間、相手のスケジュールに合わせると一日に2件程度しか回れない日もあり、結局、許諾を得る作業に

一年間近くを費やした。石田は、アポイントメントの間に余裕があれば古書街で生頼氏の装丁になる本を探した。

許諾の交渉をした会社は、「生頼先生にはお世話になったから、問題ありません」というところもあれば、詳細な契約を交わさなければならぬところもあり条件はまちまちであった。無駄足も多かった。生頼氏がポスターは描いていても、原画が著作権元にも残っていないものも多数あった。

また、生頼氏は多くの有名人の肖像画も描いている。その本人やプロダクション、故人に関しては遺族に肖像権の許諾を取らなければいけないという、当初の想定していなかった作業が待ち受けていた。通常美術展では考えられない作業量であった。そんな中、「スター・ウォーズ」関係の日本国内での著作権を当時管理していた「小学館集英社プロダクション」から、「本家であるルーカス・フィルムがディズニーに買収されてしまい、著作権クリアの業務の引継ぎに数カ月から半年くらいかかりそうだ」という予期せぬアクシデントを伝えてきた。2012年10月のことであった。交渉は結局1年近くかかり、ようやく条件が整理され、ルーカス・フィルムから数10ページに及ぶ英語で書かれた契約書が送られてきたのは展覧会が始まる8日前の2014年1月30日のことであった。

4. 宮崎県文化賞の受賞

生頼氏は賞とは無縁の画家であった。それまでに唯一獲った賞が1980年の「スター・ウォーズ」の国際版ポスターを描いたときに受賞した日本SF大会の第11回星雲賞アート部門のだけであった。知る人ぞ知る存在として、熱烈なファンは確実にいるものの、地元の宮崎では一般的には誰も知らないのではないのか？ そういう不安は企画当初からつきま



代理で県文化省を受け取った太郎氏

とっていた。そんな折、「宮崎県文化賞」の推薦が募集された。石田は「生頼先生を少しでも地元で有名にするのはこれだ!」と思いつき推薦書を書いて、宮崎県に申し込んだ。

その結果、生頼氏は平成25年宮崎県文化賞芸術部門に選出された。2013年11月6日、宮崎県庁本館2階の講堂で授賞式は執り行われた。残念ながら生頼氏本人は出席できなかったが、代理に太郎氏が授賞式に参加した。今まで評価を受けなかった孤高の作家に対し、宮崎県という小さな自治体ではあるが公の機関が功績を認めたのであった(その翌年の平成26年には文化庁映画賞で功労賞、平成27年には宮崎市功績賞を受賞する)。宮崎県内のマスコミをこぞってニュースとして取り上げた。展覧会開催の3カ月前のことであった。

5. 生頼氏年譜の作成

みやざきアートセンターは、地元での生頼展の機運を高める仕掛けも少しずつではあるが仕掛けていった。チラシは8種類、ポスターは4種類、多くのが「欲しい」と思うような図柄を選んで作成した。しかしまだまだ課題は山積みであった。中でも重要で困難な課題は、生頼氏が、どんな人生を過ごしてきたかをまとめる作業がなかなかできていないことだった。展覧会を開催しようと決まった時は既に生頼氏は、外に出られる状態ではなかった。脳梗塞の後遺症と、それに起因する認知症が進行しており、過去の記憶が曖昧で、言葉もはっきりと喋れない状態であった。

個人の名を冠した展覧会では、作家がどのような時代を生き、どのような人生を歩んできたのかを紹介することも必須であろう。しかし生頼氏からは直接聞くことは不可能であった。先生の奥様は、仕事のことは殆ど知らない。太郎氏は、高校卒業してずっと都会で暮らしていてその後の父の仕事ぶりを直接は知らない。このままでは年表も作れないため、石田は、出版社や映画会社に著作権の許可を取りに行く出張と並行して、生頼氏と一緒に仕事をしていた元編集者の人々やその家族を通じて、生頼氏の親戚の方々、そして宮崎で親交のあった人々を探し出して話を聞く作業も行った。生頼氏が当時77歳、同年代でも既に逝去している方もいる中、同氏が年賀状のやりとりをしていた人たちに連絡して当時の話を聞くなど、探偵じみた仕事も行った。

6. 生頼タワーと「奇跡」

いよいよ第一回生頼展の準備も整いつつある中、「生頼先生が手掛けた映画のポスターや書籍も一緒に展示したい」という希望が出てきた。ただ、たしかに様々なポスターや本の



ポスターと書籍がつみ上げられた「生頼タワー」

装丁も見てみたいという欲求は、確実なニーズとして来場者にはあるはずだが、有料の展覧会でポスターや書籍を見せること自体、著作権問題が非常に複雑になる。さらに、スペース的にも展示会場は限られており、現実的に展示するのは断念せざるを得ないという意見に傾きつつあった。そこで企画されたのが、大量のポスターや書籍を「タワー」の形でまとめて見せようというアイデアである。ケースに入れて見せるのは面白くない。生頼氏が半世紀にもわたって描き続けた作品を「物量作戦」で見せようにはどうしたらいいか、ということで考えついたのが「生頼タワー(誰が名付けたかは知らないが、いつの間にかこう呼ばれるようになっていた)」の誕生であった。施工の業者には無理を言い、部屋にギリギリ入る高さで広さで作ってもらった。

展覧会のキャッチコピーは「奇跡を体感せよ!」であった。このコピーは樋口監督が2013年7月に作品を選定しに宮崎に来られたときに考えていただいたもので、まさに展示作品を含め観客は、生頼タワーを目の前にして奇跡を体感することになる。2014年2月8日『生頼範義展 THE ILLUSTRATOR』が開幕する前日の7日、開会式と内覧会が行われた。そこには、今まで殆ど表に出ることのなかった生頼氏が家族に付き添われ車椅子でみやざきアートセンターに現れたのだ。自らの感性の全てを駆使して絵を描くのみに集中し、出来上がった作品を並べて観るということではなかったであろう孤高の人が、壁一面に展示された自分の作品を感慨深げに



展覧会で訪れた生頼氏（前列左端）

魅入っていた。

展覧会は好評のうちに終了し、生頼氏の再評価のきっかけとなり、翌年には文化庁の映画賞受賞となった。

7. さらなる蒐集・管理・発信へ

石田は、本来ならば1回だけの展覧会を考えていたが、未整理・未展示の作品があまりにも多いため、展覧会を3回に分けて開催することになった。2015年に開催された第2回の展覧会『生頼範義Ⅱ 記憶の回廊』では、生頼氏がイラストを描き始めた1966年から1994年までの、キャリアの前期に書かれた作品を中心に、そして2016年に開催した『生頼範義展Ⅲ THE LAST ODYSSEY』では1985年から晩年までに描かれた作品を中心に展示した。

構想開始から1回目の開催まで足掛け5年、生頼氏をはじめ生頼家の皆様、多くの映画作家や、イラストレーター、出版関係者の皆様、インタビューに応じていただいた皆さん、著作権の許諾をいただいた映画・出版・ゲーム・広告代理店等各社の方々の協力で、生頼氏の評価を高めることができた。最盛期には年間100冊以上の本の装丁を手掛け、生涯の作家生活で最低でも推定3,000点を超す作品を描き続けた商業画家＝イラストレーターである生頼の仕事はまだまだヴェールに包まれたものがある。宮崎には2600点程の作品は残っているもののまだまだ所在が分からない作品も多数存在している。

挿絵なども一図と数えれば3万点を越えるという葛飾北斎は、多くの弟子を抱えて作品を発表し続けた。一方の生頼氏は、クライアントの意向を丁寧に汲み取り資料を集め、絵の構図の構想から完成まで全ての過程をたった一人で手掛けて

いるのに加え、制作の速さと数量が他に類はない存在だと言える。ましてイラストレーターとしての作品の他に、氏の言葉によれば「真正なる者」である画家としての油彩作品も約400点程が遺っている。質量ともに超人的な生頼氏の作品を文化財として後世まで遺していくために、2017年春には、宮崎市と宮崎県も参画して一般社団法人・生頼範義記念みやざき文化推進協会が設立された。石田はじめスタッフは、この法人を拠点として、生頼作品のアカデミックな検証と、蒐集、保全に今後取り組んでいけるよう環境を整えることが必要だと考えている。2017年度は大分と東京で展覧会の開催も予定されており、今後、生頼氏の正当な評価が全国規模また国際的にも広まることを目標として、今後も活動が続けられる予定である。

このようなみやざきアートセンターの活動は、本稿冒頭でも述べたように、元来「芸術」というよりは「創作の残滓」と呼ぶべきものだったのかもしれないポスター原画をアーカイブ化することが、あたらしい「美術コレクション」の創出にまでつながり、今や自治体の文化財と呼ぶべきものにすなり始めているという点で、地方都市の芸術系NPOとしてきわめて注目すべき成功例であると言えるだろう。事実、みやざきアートセンターには毎年10グループほどの視察団が全国の自治体から訪れ、その経験と方法を学ぼうとしているが、同センターの成功は、「文化」による地域活性化のための多くのヒントを秘めているのである。

Looking for Noriyoshi Ohrai.

Creation of "Ohrai-Collection" by Miyazaki Art Center

Tatsuya Ishida
Mario Kumekawa

This paper is written by the co-authors, Tatsuya Ishida, President of Miyazaki Bunka Hompo, and Mario Kumekawa, Vice-Director of the KUAC. Miyazaki Bunka Hompo is a Specified Nonprofit Organization (NPO), which operates a cultural facility like "Miyazaki Art Center" with exhibition space, play space and learning space in Miyazaki City. Kumekawa has been an external evaluator of this "Miyazaki Art Center" since 2015 and has been involved in the position to receive consultation about the operation of facilities and corporations. Meanwhile, Kumekawa came to know an extremely interesting

case of the art-archive that accumulates records of art creation. That is the process of discovering, restoring, exhibiting and preserving original pictures of posters by Mr. Noriyoshi Ohrai, an illustrator living in Miyazaki City. Mr. Ohrai himself, who studied oil painting at Tokyo National University of Fine Arts does not regard "original" of the posters as "art work". Therefore, the original pictures were literally "decayed" in his storeroom. However, there were many original paintings of an highly popular series well known through the world such as "Godzilla" or "Star Wars". It is those famous posters of which many enthusiastic fans still exist both throughout Japan and the world. Having restored them and having conducted larger-scale exhibition three times, Miyazaki Ace Center is proposing to public institutions such as Miyazaki City, Miyazaki Prefecture, and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan to save "the Ohrai-Collection" as a cultural property and to manage it. This paper aims to report the process of giving new value to the group of original pictures, which were not originally created as "arts", and producing what can be called "cultural properties".

At first, Ishida was going to hold an exhibition of the works by Mr. Ohrai only once, but he has decided to hold the exhibition in three separate occasions, because there are too many undisclosed works. In the second exhibition "Noriyoshi Ohrai II. Memorial Corridor" (2015), he focused on the works painted in the first half of his career from 1966 when Mr. Ohrai started drawing illustrations to 1994. In the third exhibition "Noriyoshi Ohrai III, THE LAST ODYSSEY" (2016), Ishida exhibited mainly the works drawn from 1985 to the later years. The works of Mr. Ohrai, who has been handling over 100 books per year in his prime and drew at least 3,000 works in his lifetime, are still wrapped in veil. There are about 2,600 works remaining in Miyazaki, but there are also many lost works.

Such activities of Miyazaki Art Center can be said to be extremely remarkable successes as a NPO in a local city. In fact, the Miyazaki Art Center has about 10 groups of visiting teams visited by municipalities nationwide every year, trying to learn their experiences and methods, the success of the center will give every NPOs a large number of hints for cultural activities.